スペシャリストの帽子
原題: Stranger things happen
著者: ケリー・リンク (Kelly Link)
翻訳: 金子ゆき子、佐田千織
ハヤカワ文庫 FT358(早川書房)

1　本について

原題 Stranger things happen は直訳すれば「もっと不思議なことも起こってる」。早川的にはタイトルストーリーがなきゃいけない、とかあるのでしょうか。このタイトルでも良かったとは思うのですが。

ちなみに、訳は「金子ゆき子、佐田千織」と連名ですが、実際には佐田さんは「雪の女王と旅して」のみの訳で、ほとんどは金子訳ですね。「雪の女王と旅して」が S-F マガジンに初めて掲載されたリンク作品ですから、この時は訳者が定まっておらず、以降金子さん一本になった、と解釈していましたがどうでしょうか。

2　最も好きなもの／最も嫌いなもの

各人の最も好きな短篇、最も苦手とする短篇とその理由についてお聴きしたいです。これは、それをやることによって、各人のリンクに対する印象、あるいはリンクのどこを楽しんでいるか、といったことを知りたいからです。

聴くばっかりではなので、司会はどうなのか、というと、まず最も楽しんで読んだものは「スペシャリストの帽子」です。その理由を上手くは説明できませんが、全体的に陰鬱な印象やつきまとう死の感覚がうまく描けているような気がします。

逆に最も苦手なのは、「人間消失」としておきます。再読して、どういう話だったか完璧に忘れていたのはこれだけでしたので、それほど印象に残らなかった= 自分の中で軽んじていたのでしょう。

3　ジェンダーについて

にじむさんが書いておられますが (`http://bm.que.ne.jp/log/?date=20040520#p01`)、

> 全体を通してみると、まるっとお見通しな女性と、楽観的で子どもっぽい男性、という図が見えてくることもあって、おそらくジェンダー小説などに馴染みがある人の方が、抵抗無く読めるのではないか。

という意見について。

確かに女性性を感じるような気はしますが。ジェンダー論には詳しくないのですが、ジェンダー的にはリンクはどう捉えられるのでしょうか。誰かの解説を求む……。

「能天気な男性と全てを見通す女性」という構図は「黒犬の背に水」「雪の女王と旅して」「生存者の舞踏会 (略)」あたりが典型的でしょうか。

4　生と死

生と死がテーマな作品も多いですね。「カーネーション (略)」「黒犬の背に水」「スペシャリストの帽子」「飛行訓練」「人間消滅」「生存者の舞踏会 (略)」「ルイーズのゴースト」あたり。

ただ、この生死も何かの元ネタに付随するものだったり、上のジェンダーの話で言えば男の能天気さを極立たせてみせたりするための手法であって、あまり生や死といったテーマを扱おうとして扱ってるわけではないようにも思えます。

5　元ネタについて

ケリー・リンクの作品は、どうも予想以上に「元ネタ」のある話があるようですね。「生存者の舞踏会 (略)」の元ネタがあるのもわかりませんでしたので。

ところで、元ネタがわかるかどうか、というのは、リンクを楽しめるかどうか、というところにけっこう依存しているのではないか、と私は考えています。端的な例は「少女探偵」で、正直なところ私はこの話はよくわかりませんでした (ナンシー・ドリューは全然知りません)。元ネタがわかればこそずらしている部分もわかるので、元ネタを知らない読者には、意外とつらい面もあるのかもしれないな、と思うのですが、どうでしょうか。

6　各短篇について

以下は各短篇の覚え書きです。この順番で語ることはたぶんないです。上の話の流れで、各短篇について論ずることになろうと思います。

カーネーション、リリー、リリー、ローズ

死んだ男が妻に手紙を描く話。
なんだかよくわからない。

黒犬の背に水

犬とつけ鼻と失うものの話。
わかりやすい。

スペシャリストの帽子

スペシャリストの帽子にまつわる話。
タイトルストーリーですが、なぜこれがタイトルに選ばれたのかはよくわかりません。まあ、世界幻想文学大賞受賞作だからかな。長すぎるタイトルとかもありますからね。
スペシャリストってなんなんだ、帽子ってどんなだ、など色々疑問も渦まきますが、私はこれは好きです。

飛行訓練

ギリシア神話ばりに死者の国へ救出しにいく話。
わかりやすめ。

雪の女王と旅して

女性が攫われた恋人の男を探し、文句を言う話。お伽話をコケにしつつ、ジェンダー的にも読めそうですね。

人間消滅

不思議な従姉妹を観察する話。
わかりづらい。

生存者の舞踏会、あるいはドナー・パーティ

生存者の舞踏会の話。
わかりにくい。

靴と結婚

靴と結婚にまつわる話。
元ネタはともかく、わかりづらい。4つのパートをどう関連づけて考えるか、というのがポイントのような気もしますが。

私の友人はたいてい三分の二が水でできている

金髪女が宇宙人の話。いまだにちゃんとしたタイトルが暗記できないわかりづらいタイトルです。

内容もディックを意識しているのでこうなっているのでしょうか。

ルイーズのゴースト

ルイーズとルイーズとアンナとチェリストの話。
気がつけば終わっている。

少女探偵

少女探偵と僕の話。
元ネタを知らないと、あんまり楽しめない気がするんですがどうでしょう。僕は正直よくわかりません。

7　柴田元幸氏の解説について

この柴田元幸解説は、英米文学に無知な司会の目には、非常にコンパクトにまとまりつつわかりやすく、しかもリンクの作品論については説得力のある説明がされていて、よいと思いました。他の方はどうでしょうか？
引用すると、

> ケリー・リンクの書く作品は、いままで名を挙げた何人かの作家の書くもののように、「〜が……する話」というふうに一言でまとめるのは難しい。一度読んだだけでは話の輪郭がわからない作品もあるし、どういう経路の小説なのか簡単には決めがたいものも多い。

とか、

> にもかかわらず、そうした無根拠な連想や、一見ランダムな言葉の羅列が、なぜか単にランダムではなく、奇妙な必然性と伴っているように感じさせるところに、この作家の並々ならぬ力量がある。(中略) 妄想が妄想としてただ膨らんで暴走するのではなく、それが (どういうふうに、と訊かれると実は答えに窮するのだが) 巧みにコントロールされ、制御されている感じがするのだ。

とか、

> ケリー・リンクを一読して「何だかよくわからないなあ」と思っても落胆することはありません。この訳のわからなさは、夢のわからなさです。でもケリー・リンクは夢と違って再読可能、その意味では「夢よりお得」です。

とかいったあたり。

8　司会はリンクの何が嫌いなのか

S-F マガジンで読んでいて腹が立つ—というほど怒っていないですが、まああまり高く評価しないのが何故かといえば、どうにも中途半端な印象を受けていたからです。この展開なら、こう理に落ちるであろうという方向には行かない。それが意外性のある面白さなのではなく、何とも中途半端な、珍妙なお話で終わってしまうのです。私はわかりやすい物語を求める人なので。

しかし、こう短篇集で一挙に読んだのが良かったのか、短篇集では意外と悪くない、という印象でした。

ケリー・リンクの魅力というか面白さの勘所は、私は無意味性であるように思っています。ともかく意味性、寓意を徹底的に排除していて、そうでありながら奇妙に寓意のありそうな世界を描くという面白さでしょうか。

しかし、リンクの面白さについては他の意見が絶対にあると思うので、なるべく他の意見を聴きたいです。